

月報

No.460
2018年
9月



日本キリスト教団
茅ヶ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目34-35
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

説教 『 私たちはイエス・キリストによって平和を得ている 』

小河信一 牧師

ローマの信徒への手紙 5章1節～2節

1 このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、² このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。

本日与えられましたパウロの言葉を通し、私たちは「平和」に思いを寄せたいと思います。聖書が語る「平和」について、聖霊の導きのもとに理解を深め、実践する者でありたいと願います。

ローマの信徒への手紙 5:1——

このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ている。

パウロはこれまで語ってきたことを、いったん凝縮し、次へと展開しています。

すなわち、これまでの要約というのが、「わたしたちは信仰によって義とされた」です。それが、あなたたちの信仰の土台になっていますか、とパウロは問いかけています。その土台に基づいて、「皆さん、これから書くことを聞いてください」との思いが込められています。

ただ信じることによって義とされた、言い換えれば、主イエス・キリストの十字架による罪の贖いと復活の希望によって、私たちは新しい人間とされたのである、神の前に罪人ではなく全き人・義しい人^{まった}となったのである、そこで次には、とつながっていきます。このようにパウロは、自分の思いからではなく、福音信仰の面から新しいメッセージを語っています。

それが、「(わたしたちは) わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ている」というメッセージです。神との間の、私たちの平和が、「義とされた人」の生活の有り様として打ち出されています。

パウロが、私ひとり、個々人の「平和」・「平安」ではなく、私たちの「平和」と言い表している点も注目に価します。「平和」というのは、神の導きのもと、私たちが共に助け合って、作り出していくものです。

何よりも大切なのは、「神との間に平和を得ている」という点です。邦語訳聖書では、「神との間に」は「神に対して」、「神と共に」などと訳されています。

「神との間に」との訳が優れているのは、神と人との関係性の中にこそ、「平和」は成り立つものであると教えられる点です。

私たちが、大量破壊兵器や軍事的侵略者などのことを思うとき、神と人との平和が「何の役に立つのか」と無力感に襲われるかも知れません。また、神はこんなに悲惨な戦争の状況を「ご覧になっておられるのか」と不信を抱くこともあるでしょう。

確かに、これまでの歴史の中、あるいは、この世の中には、神に対する関係を揺さぶり壊すものが数多くあることを認めざるを得ません。しかしパウロによれば、平和をつくり出すこと、あるいは、戦争を避けることは、私たちが神との間に、どのような関係を持つのか、に掛かっているのです。

また、‘we have peace with God’ (KJV)、「神と共に平和を」の通り、神が臨在しておられること、神がいつも私たちのそばにおられることを信じるときに、すでにもうそこに平和が確立されています。不安に負けて右往左往することなく、立つべきところに立ち続けることです。

パウロは自分を取り巻いていた諍いや戦いに惑わされることなく、まっすぐに神を見つめていました。私たちがまた、「どうか、神よ、助けてください。あなたが平和の源です」と祈りたいと思います。

パウロは、今「平和を得ている」と言い切っています。神よ、早く、平和を来たらせてください、と言っているのではありません。これも補って言えば、主イエス・キリストの十字架と復活によって、私たちが救われたことにより、もう平和が支配していることは、決定的なのである、ということです。今、平和が無いから、将来、平和が到来しますように、というのではありません。

神から私たちに与えられている平和を、神を仰ぎながら、私たちそれぞれの賜物を出し合って守っていくことが、私たちの使命です。平和を維持するように携わらせていただくことです。

言うまでもないことですが、平和を維持することには、苦勞または困難が伴います。

D.ボンヘッファーは、ローマ 5:1 の「平和」に関して、①自分の内的な魂の平和と②キリストの平和の違いを提示しつつ説教しています。

まず、ボンヘッファーに従って、①と②とを要約すると、以下のようになります。

①彼・彼女は、ただ自分のために平和を求めていたに過ぎない。

苦難（ローマ 5:3）が襲うと、このような平和はたちまちにして消え失せる。

それは、神に対する平和ではなかったのだ。

神の与えられる苦難を憎んでいたからである。

彼らは、キリストの十字架を愛していると思っているが、しかし、自分自身の生における十字架を憎んでいる。

結局、彼らは、イエス・キリストの十字架をも、実際は憎んでいるのだ。

②イエス・キリストの十字架を愛する者、イエス・キリストの十字架において平和を見出した者は、自らの生における苦難をも愛するようになる。

「イエス・キリストの十字架の前には、おそらく膝をかがめるが、自分自身の生におけるいかなる苦難に対しても、ただ抵抗するのみである」とのボンヘッファーの一文は、私たちに悔い改めを促します。自分自身の十字架を背負って（マタイ 16:24）、襲い来る苦難に向き合うということです。

パウロはボンヘッファーの説教に符合するかのようになり、すぐ後のローマ 5:3,4 で「忍耐」を取り上げています。「忍耐」とは、字義通りに訳せば、「そのもとに留まる」、つまり、「重荷を投げ棄てないで、それを負う」という意味です。その重荷とは、元来、自分自身の十字架でありましょう。

本日お配りした、聖フランチェスコの「平和を求める祈り」は、「自分自身を捨てることによって、永遠の命に生きるからです」という結びになっています。

ここで語られているのは、主イエス・キリストが十字架において自らを捨てられた、という話ではありません。「ああ主よ」と叫んで、私たちが「自分自身を捨てる」のです。

私たちが神と共に、平和を維持していく、そして、神の御心の従って、新しい形で平和をつくり出していく、その点において苦難は避けられません。「自分自身の十字架を背負っている」かどうかという点で、神との関係性が明確にされます。私ひとりで恐れおののくことはありません。なぜなら、それは、主の十字架であり、それに軛くびきでつながれている私たちの十字架だからです（マタイ 11:29-30）。私たちの安らぎと平和は、そこにあります。

現実の世界を見れば、いかに平和を保つことが難しいか、あるいは、紛争状態から抜け出すのに、どれほど挫折を繰り返しているか、がよく分かります。そうした現状に対し、人間がただ勇気と努力をもって解決しようとするならば、疲れ果ててしまうことは目に見えています。そうした中で、主イエス・キリストは平和をこの

世にもたすために、最大の苦難をこうむってくださいました。そして、私たちがまだ罪人であったときに、神は愛をあらわし、私たちを義としてくださいました（ローマ 5:8-9）。私たちはそのことを信仰の土台として、主と共に苦難の道を進んでゆくのです。

それは、神につながれて、「私たちの平和」を保ち、つくり出す道です。私ひとりでは、十字架の重荷を担い続けることは、困難でしょう。単なる疲労という以上に、抵抗や拒絶の態度を示すことすらあるかも知れません。しかし、その時にこそ、「私たちの平和」の担い手である他の兄弟姉妹に祈ってもらうのです。助けてもらうのです。私がいち直ったら、今度は、自分が苦しんでいる隣人を助けるのです（ルカ 22:32）。

ローマの信徒への手紙 5:2——

このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。

ここでパウロは、さらに調子を高めるかのように語っています。パウロは義とされた私たちの生活を、その現在と行く末を、青写真のように描いています。

最後の句「神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」を、パウロの勧めとして言い換えるならば、以下のようになります。

「将来、私たちは神の栄光に、全面的にあずからせていただくことを期待して生きてきましょう。」

将来の信仰生活を描く際に、パウロは今、私たちがどこに立っているのか、を確認しています。ローマ 5:2「今の恵みに」（新共同訳）は直訳すると、「今私たちの立っているこの恵みに」となります。

私たちは今や、これまでとは違った所に「立った」のです。神が主イエス・キリストを通して為された救いの御業を基盤として、私たちは立っています。カルヴァンが、「しっかりと足で踏みこたえている人たちは、常にキリストに固着するのである」と勧告している通りです。一言でいえば、私たちが立つべきところ、それが「この恵み」です。疑い深く弱い自分が神に赦されて、そこに立っている、神の恵みです。

パウロ自身、「彼（アブラハム）は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて」（ローマ 4:18）と述べているように、将来への希望には不安がつきまっています。その不安を知っている者として、パウロは将来への希望を宣言するとき、今の立脚点を明示したのです。

詩編 23:5——

わたしを苦しめる者を前にしても
あなたはわたしに食卓を整えてくださる。
わたしの頭に香油を注ぎ

わたしの^{さかづき}杯^{あふ}を溢れさせてくださる。

「わたしを苦しめる者」は、口語訳では「わたしの敵」となっていました。敵の面前での食事と言え、イスラエル民族の救いの原点となった食事、すなわち、エジプト人のただ中で行われた「過越しの食事」（出エジプト記 12:1-28）が回想されます。それはまぎれもなく、神が整えてくださった食卓でした。

危険が迫る中、神のまなざしに守られて、私たちに命の糧が与えられるのは、なんと幸いなことでしょうか。ただし、食卓を取り囲んで、「わたしの敵」（原文・複数形）が私たちの様子をうかがっているのは、充分味わえないような、落ち着かないような気がします……。

しかし大切なのは、「災いを恐れない」（詩編 23:4）こと、「わたしの敵」が目の前にいても恐れないことです。なぜなら、これは、神の食卓、神が給仕して下さる祝宴だからです。そこには、命のパンと共に「香油」と「杯^{さかづき}」とが満ちあふれています。

ところで、「わたしの敵」（敵たち：複数形）の存在は、「私たちの平和」と強く連関しています。殊に詩編 23:5 を、主イエスの御旨のうちに読み返すとき、敵を前にした平和なる食卓の出来事はいっそう真実味を帯びてきます。

主イエスも幼いとき、詩編 23 編が朗読されるのを聴かれたことがあるでしょう。よく知っておられた神の言葉に違いありません。そして奇しくも、主の十字架の前夜に、「わたしを苦しめる者を前にしても」という食卓が整えられました。そうです、主イエス・キリストの最後の晩餐です！

その時、主イエスはその場から「わたしの敵」を排除されていたのでしょうか。イスカリオテのユダが途中まで、その食卓に連なっていました。彼こそ、主イエスを裏切った「敵」です。

確かに、私たちの教会の聖礼典である聖餐式には、キリストを信じる者が陪餐いたします。しかし、主イエスの御旨は、相對している「わたしの敵」、まだキリストを受け入れていない人にも及んでいるのではないのでしょうか。主イエスが「しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタイ 5:44）と言われた通り、主はそのような人々が立ち帰るのを待っておられるのでないのでしょうか。主イエスは慈しみのまなざしをもって、今はまだ聖餐にあずかれない人々をご覧になっておられるでしょう。

繰り返しますが、私たちが平和を維持する、そしてさらに平和を実現する（マタイ 5:9）、ということが、神と共なる私たちの使命です。その際、最大と言ってよい問題は、どのように敵対している人たちに、また、戦争や争いに心惹かれている人々に向き合うか、ということではないのでしょうか。その根本のところ、^ひ「敵を愛しなさい」という主の命令を置き、疲れ果て投げ出しそうになっても、しっかり

と神の恵みに立ち続けるのです。ここでまた私たちは、最も手強い敵が、自分自身の内にある罪に惹かれる心であることを、謙虚に省みなければなりません。

パウロはローマ 5:2 の最後で、「(私たちは) 神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」と述べています。

先に私が意識して、「将来、私たちは神の栄光に、全面的にあずからせていただく……」と言ったのは、主イエス・キリストの十字架と復活による神の勝利が確立されながらも、今なお、この世には抵抗勢力、神の御心に反して争いを起こす者たちが存在しているからです。

しかし、そこであきらめてはなりません。自分で、この希望は失望に終わると決め込んではありません。神と共に、兄弟姉妹と一緒に、苦難を乗り越えるのです。

将来、神から賜るものが、「神の栄光」である、とパウロは言います。

竹森満佐一牧師（故人）は、「この句を読んで、人は失望するかも知れない。期待がはずれたように思う人があるかも知れない」と述べられています。「神の栄光」ではなく、もっと違ったもの……富、健康、名誉、等々……が欲しかった、と言う人はいないか、と問いかけられています。

将来において、神に栄光を帰すことが中心です。その時、まことに神は神であられると確信させられるのです。神を神としてあがめること、すなわち、十戒の第一戒（出エジプト記 20:3）が終わりの時に達成されることが、私たちの真の希望です。主イエス・キリストに再びお会いした者として、神を神とします、ということです。それが、神と共に平和をつくり上げていった者に対して与えられる喜びなのです。